



新入社員の思い出



印藤 晴子

今月から月に1回の料理教室に通うことにしました。野菜料理中心の教室なので楽しみです。旬の野菜の効能や美味しい食べ方などバッチリ学んできますね。いつか、このコーナーで手料理を紹介できるように頑張ります！さて、今回のテーマは「新入社員の思い出」です。

入社4年目の重富です。お客様とのやり取りでメールを使うことが多いのですが、最初のころはメールの書き方がわからずによく社長に添削してもらってました。今でもまだまだですが…。それから、入社当時はコンタクトを使っていましたが、黒ぶちの眼鏡に変えました。第一印象で真面目で落ち着いた人に見られるかな、と思って(笑)。もっと経験値を上げて、頼られる営業になりたいと思っています。



ゴールデンウィークに、義父母と義兄の家族とうちの家族で、阿蘇を旅行してきました。内牧温泉で1泊し、550メートルある高森湧水トンネルを散策しました。ワイワイ言いながら歩けるから、たまには大人数の旅もいいですね。



重富 幸治郎

入社9年目になりました実松です。入社して驚いたことは、私が通っていた幼稚園が会社のそばにあったことです(残念ながら今にはなくなってしまいました)。園舎も昔と変わってなくて懐かしかったです。ただ、当時は広く感じてた運動場が狭く感じて「大人になったんだなあ」と思いました(笑)。それで思い出したのですが、なんと、生まれた家も会社の近くでした。4歳まで暮らしていたのに、すっかり忘れていた私って…(汗)。



5月の連休に長崎の家で草取りをしてきました。庭のあちこちにピンクの花をつけた草が生っていたので、まとめて抜いてやったら、義妹が思わず「あら〜」と(汗)。草の匂いに浸って、楽しい一日でした。



実松 千恵子

入社5年目を迎えた沖です。入社当時の思い出は、緊張のあまり、表情が固まったまま仕事をしてたことです。周りからは「おとなしい人」「話しかけても、応えてくれなさそうな人」と思われていたらしく、最近ではよく「第一印象と違う」とか「だまされた！」などとブーイングに遭っています。新入社員の時代にやらかした数々の失敗から学び、何度も何度も見直すクセがつかしました。今では、石橋を叩きすぎるくらいです(苦笑)。



社長から借りた「断捨離」の本を読んで、連休中に要らない物を捨ててみました。とっておいたチラシやDM、昔の年賀状などが、なんとゴミ袋に4袋分！おかげで、片付けた後は、部屋が広くなりました。



沖 知美

月刊 つばさ



2011年6月号

あなたと、あなたのお店を訪れるお客様の健康のために、お役に立てたら幸せです。

病気が教えてくれたこと



ゴールデンウィークが終わったと思ったら、もう6月。私は例年出勤していたゴールデンウィークに、今年は暦どおりのお休みをとり、ずいぶんリフレッシュできました。

この変化は3月に胃潰瘍になり、いろいろなことを考える時間を持てたおかげだと思います。病気のほうはすっかり完治しましたのでご安心ください。

仕事でもプライベートでも「～ねばならない」ことが多々あって(笑)、ほんのちょっとした時間でも効率よく…などと考える落ちつかない人生を続けていたような気がします。

病気になって改めて感じたのは、「私の仕事は短期決戦ではない」ということ。長丁場に耐えられる体力と気力と戦略が必要ですが、体力と気力には限りがあるので(汗)、スタッフに任せるところは任せ「報・連・相」を徹底していくことにしました。

「どうしても自分がしなければならぬこと」に専念することでORTICの将来にも良い影響が与えられると信じております。

みなさま、今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

株式会社ORTIC
代表取締役

印藤 晴子





新商品ができるまで

～商品のネーミングとパッケージ用コピー～

ORTICでは、OEM(受託製造)を承っています。このコーナーでは、新商品開発の際に役立つ情報をお伝えしていきます。今回は商品のネーミングとパッケージ用コピーについてお話しします。

新商品のネーミングをつくるための条件

1) シンプルであること

どんな商品であるかわかりやすく、イメージしやすいネーミングであることです。「セールスポイントをいかに簡潔に凝縮できるか」が重要になります。

2) 視覚的であること

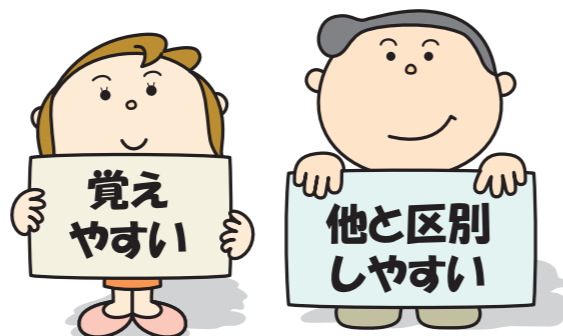
ネーミングは文字で構成されていますが、文章のように読む情報ではありません。一目見てすぐに認識され、記憶されるべき情報です。文字が一つの塊として、目に飛び込んでくるような、視覚的なものでなければなりません。

3) 音が良いこと

音の響きがよく、リズム感があるネーミングだと、親しみやすく、記憶にも残りやすい商品になります。

4) 類似性がないこと

ネーミングには特許があり、登録商標という権利が生じます。他社が同一あるいは類似に判断される登録商標をもっている場合は、そのネーミングを使用することはできません。商標の類似を判断するには、様々な要素の分析があるので、専門弁理士に依頼する必要があります。



パッケージ用コピーをつくるための条件

1) 最も伝えたいことが伝わるワードを

パッケージに掲載されるキャッチフレーズは、限られたスペースの中で、一目で興味を引くものでなければなりません。言いたいことをあれもこれもと欲張らず、いちばんに伝えるべきことをはっきりとさせることが、訴求力のあるワードづくりのポイントとなります。

2) 興味のきっかけとなるワードを

健康食品の場合、効果効能を訴求する表現は薬事法によって規制されています。事実をすべて伝えることができないからこそ、一目で「何だろう?」と思わせる、興味や関心を引くワードづくりが重要になってきます。店頭で並ぶ製品であれば、実際に手にとってみたい、店頭スタッフに問合せたくなるのがポイントです。

Point 訴求力の強いワードとは?

特筆すべき特性のある製品、同じカテゴリー製品と比較して突出した優位性をもつ製品については、その特性や優位性がそのまま訴求力をもつワードをなします。「〇〇が△△の□倍!」という表現などがあたります。

Point 薬事法に抵触するとは?

食品として販売される商品は、たとえ事実であっても、医薬品的な効果効能を標榜することはできません。食品が医薬品的な効果効能を標榜すると、無承認の医薬品とみなされ、薬事法違反に問われます。



それ、ウソです

丸山寛之

第43回

肺胞の数

気管支の役目は、空気を肺の機能部分、すなわち肺胞という顕微鏡でしか見えない七億五千万個もある空気袋に送ることである。(リーダーズダイジェスト選書『人体の驚異』=「肺の素晴らしい働き」)

人間は酸素なしでは生きられない。生きているということは、酸素を吸っているということにほかならない。

外界(空気)から酸素を体内に取り入れ、体内でつくられた炭酸ガス(二酸化炭素)を体外へ放出する一この一連の過程が、呼吸である。

鼻や口から吸い込まれた空気は、のど(咽頭)から気管→気管支を通して、左右の肺の中に入り、さらに何度も枝分かれして細くなった細気管支の先端にある肺胞に送り込まれる。そして、その空気中の酸素と、血液中の炭酸ガスを交換する働き(ガス交換)が、肺胞の壁を透して行われる。

気管支が枝分かれを繰り返して、しだいに細くなっていき、その先端におびただしい肺胞をつけている肺の形状は、ブドウの房にたとえられる。房の枝の太い部分が気管支、細い部分が細気管支、実が肺胞である。

肺胞の1個、1個は、直径0.1~0.2mmと数の子の粒よりも小さいが、両方の肺を合わせると約3億個にもなる。一というところで、今回のウソにたどりついたわけだが、肺胞の数が「七億五千万個」というのは、いくらなんでも多すぎる。

この、人体のあらゆる器官のさまざまな働きを、わかりやすく面白く教えてくれるポピュラーな解説本の発行は、1963年だ。いまのような精度の高い計数盤ができてなかったための錯誤だろう。

さて、ところで、肺に慢性の炎症が生じ、気管支が狭まり、肺胞が壊されていく病気が、いま世界中でふえている。「COPD(慢性閉塞性肺疾患)」という病気だ。

2008年の厚生労働省調査によると、治療中の患者数は17万3000人だが、01年に行われた大規模疫学調査(40歳以上の男女対象)による推定患者数は53

0万人以上だ。9割以上の罹患者が、治療はおろか診断も受けていないことになる。

世界中では年間約300万人がCOPDによって死亡し、2020年には世界の死亡原因の3位になると、WHO(世界保健機関)は推定している。

症状は、息切れ、せき、たんなどから始まり、病気が進むと呼吸不全や右心不全(心臓の右心室の働きが低下して肺へ十分な血液を送り出せなくなった状態)が起こる。

最大の原因は、喫煙だ。ニコチン、タール、一酸化炭素などを含むタバコの煙や微小粒子を吸い続けていると、気管支や肺胞に慢性的な炎症が起こり、気管支の粘膜が傷害され、肺胞の破壊が進行する。

しかし、喫煙率は年々下がっているのに、なぜCOPDが増えているのか?

タイムラグ(時間のずれ)があるのだろうというのが、一つの説明だ。アメリカの喫煙率が下がりはじめたのが1976~80年で、96年ごろから肺がんが減り始めた。喫煙人口の推移と肺がんの発症率のタイムラグ約20年というわけだ。COPDの場合、それが仮に10年遅れだとすると、アメリカのCOPDはそろそろ頭打ちになるかも知れない。

ともあれ、COPDは、肺がんと並ぶ二大たばこ病の一つだから、予防も治療も、まず禁煙だ。一度破壊された肺胞はもう元には戻らない。軽症のうちに進行を止めなければいけない。息切れ、せき、たんに気づいたら、すぐ呼吸器内科へ。



丸山寛之 プロフィール
NPO法人日本医学ジャーナリスト協会会員。1932年、鹿児島生まれ。新聞記者、医学雑誌編集者を経て医療ライター。著書=近刊『『がん』はいい病気』(マキノ出版)「読むサプリ」(明拓出版)のほか、「この酔狂な医者たち」「名医が治す」など。雑誌『壮快』に「名医に聞く」、地方新聞16紙に「健康歳時記」を連載中。

